

戒法門

寛元元年 二二歳

夫人は天地の精、五行の端なり。故に悟りあて直きを人と云ふ。心に因果の道理を弁へて人間には生まれける由を知るべし。一代聖教のおきてには、戒を持ちて人間には生まるとおきてたり。

戒と申すは一切の経論に説かるゝ数は、五戒・八戒・十戒・十重禁戒・四十八輕戒・二百五十戒・五百戒・乃至八万四千戒。此くの如く戒品多しといへども、始めの五戒を戒の本と申し候ぞ。五戒と申すは、一には慈悲を起こして物の命を殺さざる戒を不殺生戒と名づく。道理なき殺生を制するなり。一を殺して万を生かすべきをば許すべし。二には盗みせざる戒を不偷盜戒と名づく。道理なき盗みの事なり。三には他人の妻を犯さざる戒を不邪淫戒と名づく。四には妄語せざる戒を不妄語戒と名づく。由なき事に妄語せざれとなり。五には酒を飲まざる戒、僻事を制するなり。薬酒をば飲むべし。先世に三宝の御前にして此の戒を受けし時、天には日月・衆星・二十八宿・七星・九曜・五星、地には五つの地神・七鬼神・十二神・三十六禽、又梵天・帝釈・四大天王・五道の冥官等、此の五戒を受くる人を護らんと誓ひ給ひき。

又五戒に依って生ずべき処を定む。不妄語戒は大地をつくる。不殺生戒は草木となる。不邪淫戒は大海・江河となる。不盜戒は風となる。不飲酒戒は火となりて草木の中にある。又五戒は五山となる。南には火の山、北には雪の山、東には木の山、西には金の山、中には土の山なり。空の雲も五戒なり。青き雲は不殺生戒となる。白き雲は不盜戒となる。黒き雲は不邪淫戒なり。黄なる雲は不妄語戒なり。赤き雲は不飲酒戒なり。雨空より降るに又五つの味あり。すき味の雨降りては、青き花一切すき菓をいだす。からき味の雨は白き花一切のからき菓をいだす。しわはゆき味の雨降りては、黒き花一切のしわはゆき菓をいだす。あまき味の雨降りては、黄なる花一切のあまき菓をいだす。苦き味の雨降りては、赤き花一切のにがき味の菓をいだす。又春七十二日は東、不殺生戒。夏七十二日は南、不飲酒戒。秋七十二日は西、不盜戒。冬七十二日は北、不邪淫戒なり。四季の末の土用七十二日は中央、不妄語戒なり。又天地父母となりまします。父母交懐の時、父の淫は白く母の淫は赤し。赤白の二滯もろともに五戒より生ず。父母の精血下りて、父の淫は骨となり、母の淫は肉となる。二つの足、二つの手、一つの頭、是も五戒より出でたり。又子の腹の中に肝の臓と云ふ物あり。七葉にして色青し。母のすき物を願ひし時出で来たる物なり。其の中に魂と云ふ神あり。眼に出でて物を見る。東方の空に歳星と申す星あり。不殺生戒の人を護らんと誓ひし故に子の神となる。又母のからき物を願ひし時、子の腹に肺の臓と云ふ物出で来て、其の色白く其の形八葉にして

蓮華なり。其の内に魄はくと云ふたましひ有りて鼻に出でて物をかく。西の空に太白星と云ふ星あり。不盜戒の人を護らんと誓ひし故なり。又母のながき物を願ひしかば、子の腹に心の臟しんと云ふ物出で来て、其の色赤く、其の形とり鶏の卵かいこをさかさまに立てたるが如し。其の内に神しんと云ふたましひ有りて、舌に出でて物を味はふ。南の空に熒惑星けいこくせいと云ふ星あり、不飲酒戒の人を護らんと誓ひし故なり。又母のしわはゆき物を願ふに依って、子の腹に腎の臟と云ふ物出で来て、其の色黒く其の形半月なり。其の内に志と云ふたましひ有りて、耳に出でて物を聞く。北の空に辰星しんせいと云ふ星あり、不邪淫戒の人を護らんと誓ひし故なり。又母の甘き物を願ひし時、子の腹に脾の臟ひと云ふ物出で来て、其の色黄にして其の形一葉四角なり。内に意と云ふたましひあり。四身に遍してあつきぬるきをしる。先世に不妄語戒を持ちし時、中央ちんせいに鎮星と云ふ星あり、此不妄語戒の人を護らんと誓ひし故なり。

殊には不妄語戒を委くわしく申すべし。妙樂大師だいり きょう提謂經を引いて云はく「不妄語戒は四時の如し。土は中央に主たり。中央は脾に主たり。脾の臟は身と土となり。四季に主たり。不妄語戒も四季に遍す。身には五根に遍す」と。五戒を破る中に不妄語戒を破るは罪深き戒にて候。其の故は世間の人妄語し候へば、冬は夏になり、春は秋になり候。故に冬温かにして草木出生して花さき菓ならず。夏はさむくて物そだたず。春・秋も此を以て知るべし。当時の世間是体に候はずや。態と妄語をさせて世の中を損じさし、人をも悪道に墮とさんりょう料ひらがたに、天狗外道平形の念珠を作り出だして、一遍の念仏に十の珠数を超りたり。乃至一万遍をば十万遍と申す。是念珠の薄ひらく平たき故なり。是も只申すにあらず。念珠をく超るに平数珠を禁めたる事諸經に多く候。繁き故に但一・二の經を挙ぐ。数珠經に云はく「応に母珠を越ゆべからず、過諸罪に越ゆ。数珠は仏の如くせよ」と。勢至菩薩經に云はく「平形の念珠を以もちふる者は此は是外道の弟子なり、我が弟子に非ず。我が遺弟ゆいていは必ず円形の念珠を用ゆべし。次第を超越する者は因果妄語の罪に依って当に地獄に墮すべし」云云。此等の文意を能く能く信ずべし。平たき念珠を持ちて虚事をすれば、三千大千世界の人の食を奪ふ罪なり。其の故は世間の人虚事をする故に、春夏秋冬たがひて世間の飢渴け かつ是より起こり、人の病ひとえこれより起こる。是偏に妄語より始まれるなり。かう申すとも、此の世の中の人治は心なをるまじく候へども、又心有らん人はさては僻事ひがごとにこそ有るなれと知らしめんが為に經文を挙げ候。又世間の念仏者げ、現に夢に智者見えたりけるなど申し候ぞ。天狗の見せたる夢なり。只道理と經文とを本とすべし。又木・火・土・金・水も五戒なり。木をば曲直と云って、まがれるもあり、なおきもあり、少陽しょうようとかたどれるなり、故に春生ず。火をば炎上と申して空へのぼる、ものを熱するなり。五穀の火にあひて飯しいとなるが如し。太陽とかたどれる故に、極めてあたゝかなり。土と云ふ物は社しゃしよく稷と云って、万の物をわかよるずし出だすなり。是又少陽なり。金かね

は禁めとなる。是^{しょういん}少陰の物なるが故にかたし。物のおこりを禁むるなり。水をば^{じゅんか}潤下と云って、物を^潤うるをし、^養やしなふなり。陰の終にはとくる故に水なり。又五行の相生と云ふ事あり。木より火生じ、火より土生じ、土より金生じ、金より水生ず。是は常の人のしるところなり。又水は^{たいいん}太陰の物にして、くらかるべき物なり。何の意ぞ、水の底^明あかきや。木は少陽の物なれば^明少しあかゝるべし、何の意ぞ、木の中^暗くらきや。火は太陽の物なれば大いにあかゝるべし、何の意ぞ、火の中暗きや。土は少陽の物、少しあたゝかなるべし、何の意ぞ、ひゆるや。金は少陰の物、少しくらかるべし、何の意ぞ、すこしあかきや。此等は智者の知るところなり、繁き故に注せず。又五行の相剋^{そうこく}と云ふ事あり。木の敵^{かたき}は金なり。金は勝ち、木は負くる故なり。春と秋とは敵対の季、東と西とは敵対の方なり。火の敵は水なり。水は勝ち、火は負くる故なり。夏と冬とは敵対の季、南と北とは敵対の方なり。土の敵は木、木は勝ち、土は負くる故なり。木と金と合ふて金の^勝かつ事は、堅きと和らかなるとの故なり。火と水と合ふて火の水の負くる事は、^暖あたゝかなると^冷つめたきとの故なり。土と木と合ふて木に土の負くる事は、多と一との故なり。土は^徹的の如し。木は土をとる時、土五つにわれ、木は^徹箭の如くしてとるなり。

我等が眼は木より生ず。耳は水より生ず。鼻は金より生ず。舌は火より生ず。身は土より生ずるなり。上の五行をもて五根の損ずるを知って、病の有り様を知るべし。又五根の損ずるは、五戒の破るゝ故なり。させる^{そらごと}虚事をせぬ人も、あまりにすき物を好めば、舌損じ身に^{かさ}瘡多し。させる物をば殺さねども、辛き物を多く食すれば^{まなこ}眼損ず。是を以て余の戒をも知るべし。人目には五戒を持ちて貴き様なれども、食物に五戒を破りて三悪道の主となり、人には善を疑はせ、我は^{ごころ}仏法を恨む。此の^{おおむね}比の世間の人、大旨是に似たり。戒を習はんと思はん者、能く能く我が身を知るべきなり。

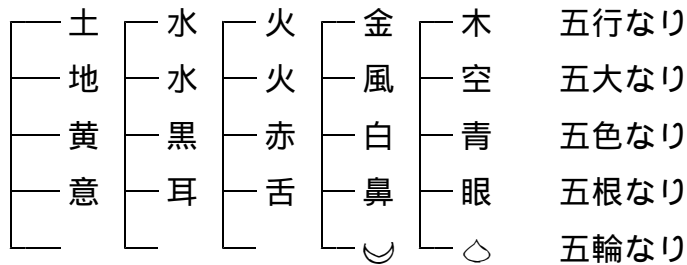
春七十二日は木勝つ故に、我が身に瘡^痒出でて身かゆし。夏七十二日は火勝つ故に、我が身熱して汗たる。秋七十二日は風勝つ故に、我が身^寒ずさまじく秋風に身損ず。冬七十二日は水勝つ故に、我が身^冷寒くつめたし。四季の土用には土勝つ故に、我が身ふとる。又我が身の肉は土、骨の汁は水、血は火、皮は風、^{すじけ}筋毛は木なり。又臍より下は土、臍より^{うえ}上胸さきまでは水、胸さきより上喉までは火、喉より口までは風と金となり、口より上^{いただき}頂までは木と空となり、是も五戒なるべし。又三千世界も五戒を以て作れるなり。火と空とは我が頭と腰となり、大海は腹なり。春と夏とは脇なり、秋と冬とは背なり。大骨の十二は十二月なり、小骨の三百六十は三百六十日なり。口の気は空の風なり、鼻の気は谷の風なり、身の毛孔の風は家の風なり。右の眼は月、左の眼は日なり。髪は星なり、眉は北斗なり。血脈は江河なり、骨は玉石なり、身の毛は草木なり。我が身より一切の人間、乃至依報の国土まで五戒を以て作れるなり。故に世間に物を殺す事多けれ

ば、東の木星と変じて彗星と成りて空に出づ。此の時春の草木おひとゞまる。又此の星人間に下りて、人の眼より入って眼の病となる。世間に偽り多ければ、中央の土星と変じて彗星と成りて空に出づ。此の時大地^瘠やせて石となる故に草木おひず。又此の星下りて人の口を病ましむ。世間に盗人多ければ、西の金星と変じて彗星と成りて、空に出づる時秋の菓すくなし。又此の星下りて人の鼻に入りて病となり、^{いくさ}戦あて世の乱れとなる。世間に酒をのむ者多ければ、南の火星と変じて彗星と成りて空に出づ。此の時早魃^{かんばつ}有りて草木^枯かるゝ。又此の星人身の内に入りて疫^{やくびょう}病世に多し。世間に邪淫多ければ、北の水星と変じて彗星と成りて空に出づる時、大水世間に行き、此の星人の耳より入りて身のひゆる病となれり。五戒破れて世間の五穀^{ごこく}損ずれば、身の五臓もよはく成り、五神^{すみか}も^{すみか}栖を失ふ。此の故に五つの鬼神身に入って人の心^{たぶら}を^{たぶら}誑かすなり。日月の光も失せて天地の禍^{わざわ}ひとなり、後生^{ごしょう}には五戒の大地破るゝ故に三悪道を^{たぶら}栖とす。臨終には顛倒^{てんどう}して只此の事にあえり。上の五戒は名目は提謂経に出でたりといへども、意は止観・真言の道理を以て書けるなり。善導の釈にも仁・義・礼・智・信、地・水・火・風・空の名計りは挙げたりといへども、^難其の義理なし。又浄土宗の学者も知ることあたはず。是^{これ}体^{てい}に知らずと云ふとも、浄土に生まれなんや。暫く小善成仏と申すは是^{これ}体^{てい}に候なり。浄土宗の学者、伝教大師の釈を引けども、末法には持戒の者なしと云ふ釈の意を知らずして、人々を迷はず法門なり。恐るべし恐るべし。

次に^{じょう}定^{じょう}の法門^その事^そ。夫定と申すは多くの定ありといへども、先づ出入の気を知るべし。静かなる処に居して、左の足を右の股にかけ、右の足を左の股にかけ、左右の手を合はせて^拳こぶしを^握に^握ぎれ。大指^{おおゆび}を^握に^握ぎりこめよ。口を合はせて鼻より気を入れ、口より気を出だせ。口の気は^温あたゝか^軽にか^重ろし。火と風との故なり。鼻の気は^冷おもく^冷つめたし。土と金との故なり。出入の気は^{あらそ}争はずして出だし入れよ。出入の気さは^{たきぎ}がしくば、我が身に病有りと知るべし。譬へば煙の清濁を見て^{たきぎ}薪の生乾を知るが如し。

- | | | |
|----|-----------------------|--|
| 春 | 仁 慈を以て義と為す
肝 不殺生戒 | 眼木青酸木の山雨の味酢し。歳星東に出づ。眼の病あり。 |
| 夏 | 信 乱れざるを本と為す
心 不飲酒戒 | 舌火赤苦火の山雨の味苦し。 ^{けいこくせい} 熒惑星南に出づ。舌の病あり。 |
| 土用 | 智 偽らざるを義と為す
脾 不妄語戒 | 身意土黄甘土の山雨の味甘し。鎮星中に出づ。身の病あり。 |
| 秋 | 義 理を以て義と為す
肺 不偷盜戒 | 鼻金白辛金の山雨の味辛し。太白星西に出づ。鼻の病あり。 |
| 冬 | 礼 敬ふを以て本と為す
腎 不邪淫戒 | 耳水黒 ^{かん} 鹹雪の山雨の味鹹し。辰星北に出ず。耳の病あり。 |

木より火生じ、火より土生じ、土より金生じ、金より水生ず。木の敵は金、金の敵は火、火の敵は水、水の敵は土、土の敵は木なり。



雨の五味の次第の事。東方の雨はすし。不殺生戒、青・眼・春・草木。南方の雨は苦し。不飲酒戒、赤・舌・夏・火。中央の雨は甘し。不妄語戒、黄・意・土用・大地。西方の雨は辛し。不偷盜戒、白・鼻・秋・風・金。北方の雨は鹹し。不邪淫戒、黒・耳・冬・大海・江河。

五山は即ち五戒なる事。東は木の山、不殺生戒。南は火の山、不飲酒戒。中央は土の山、不妄語戒。西は金の山、不偷盜戒。北は雪の山、不邪淫戒なり。

五常は即ち五戒なる事。仁と云ふは人を憐れみ、生を慈しみ、物を育くむ心なり。義と云ふは事の謂はれを違へず、^{よこしま}邪なる事をなさず、万事に理を失はざる是なり。礼と云ふは父を敬ひ、母を敬ひ、天道仏神を貴び、^蔑ないがしろにせざるを云ふなり。智と云ふは事の有り様をよく知りて、善事悪事を弁へ、作すまじき事をなさず、作すべき事をなす是なり。信と云ふは事に於て誠を致し、^{ひがごと}僻事をなさず、心の底に思ひ解くる是なり。又仁は不殺生戒、物を憐れむ故に物の命を断たざるなり。義は不偷盜戒、万の理を失はざる故に、人の物を^{あるじ}主に知らせずして我が物とせず、又押しても取らざるなり。礼は不邪淫戒、淫は必ず礼を破る。愛心あればさるまじき人なれども、邪なる振る舞ひをなす。是を守れば上下濫れず、行法もたゞ^正しきなり。智は不妄語戒、物の有り様を知りぬれば妄語せず。信は不飲酒戒、心狂乱せず、即ち信あるなり。酒は人の心を乱す故なり。

私に云はく、此の五戒は仏いまだ出世し給はざる時は、外道等も之を持ちて、天上に生ずと教ふるなり。但し持犯計りを沙汰して、^{さた}其の上に仏法を聞かんことをば知らざるなり。仏世に出で給ひて此の五戒を持ちて人身を受けて、其の上に仏法を聞きて悟りを開くと説き給ふなり。然れば此の五戒に様々の功德を備へて、戒として撰せずと云ふことなしと説き給ふ。此の五戒を根本として大乘の諸戒も具足するなり。故に此の五戒をば具足根本業^{くそくこんほんごうしやうじやうかい}清浄戒と名づくるなり。此の五戒若し破れつれば一切の諸戒皆破る。五戒は破るといへども、大乘戒は持ちたりと云ふ事は之無し。根本戒と名づくるは此の故なり。三乗の賢聖も、大小俱に此の戒を持つ故なり。仏も此の戒を持ち給ひて、人中には出で給ふなり。若し此の戒なくば、^{じやうぼん}浄飯王宮に生まれて菩薩と云はれて、六年^{くぎやう}苦行

して仏となり、大丈夫だいじょうぶの身と云はれ給ふ事有るまじ。一切衆生も五戒に依らずと云ふことなし。魚に五つのひれあり、是即ち五戒の体なり。馬に四支有りて又一頭あり、是五戒なり。之に準じて一切衆生を知んぬべし。三悪道の衆生も知んぬ、五戒の体なりと云ふことを。戒は破るれども戒体は失せずと云ふことをば、是を以て意得べき事なり。破戒と失戒と変目のかはりめをば、此等にて思ひ合はずべし云云。情事つらつらことの情を案ずるに、山川・谿谷けいこく・大海・江河・土地・草木一切何物か五戒の体に非ずと云ふことなし。委しくは提謂経だい い きょうを見るべし。地獄の衆生も五戒を持つ、餓鬼の衆生も五戒を持つ乃至云云。地獄等の衆生の持つ所の不殺生戒も、仏・菩薩の持つ所の不殺生戒も、但不殺生戒は同じことなり。但し所持の法は変目かはりめなけれども、能持の人には差別あり。故に沈浮も有るなり。然れども戒体に於てはただいず只何れも一なり。爰を以て一業とは云ふなり。是体の謂れをば、法華経ならでは得云えいはぬ事なり。法華経の開会の法門と申すは、此の五戒を開会するなり。経文委しく見るべし云云。

鶏が子をは育ごくみ、烏が子をか愛なしむまでも皆五戒の謂れなり。五戒と云ふは仏因なり。然ればかゝる畜生までもはべ仏法を行ずるにて待るなり。慧遠法師がえ おんぼっし ろうぎ螻蛄をも超えずと云ひけん事ことも理ことわりなり。畜生云云、修羅云云、天云云、声聞云云、縁覚云云、菩薩云云、仏云云、天竺の人云云、唐土の人云云、日本の人云云。文に云はく「他我た われに色しきを恵む、与へざれば取らず。此の色の上に於て仁・讓・貞・信・明等の五戒・十善を起こさば人天の四運なり」と。余色と云ふは九界の身なり。余塵と云ふは九界の財物資生の具なり。余界と云ふは九界なり。「他我た われに色しきを恵む、与へざれば取らず」と云ふは人界の事なり。是則ち五戒なり。提謂経だい い きょうに云はく「五戒は天地の根本、衆靈の源なり。天之これを持って陰陽を和し、地之を持って万物を生ず。万物の母・万神の父、大道のはじめ元、泥洹のないおん本なり」と。

蓮 長